



先日、なんとなく日曜美術館を見ていたら「霧の彫刻家」という言葉が目にとまった。霧の芸術家ではなく彫刻家とはどういう意味だろう、と思い番組を見始めた。霧の彫刻家とは中谷芙二子(なかやふじこ)氏のごとで、人工霧を使った芸術表現を続けている人らしい。大都会の空き地にセットをつくり人工の霧で満たして幻想的な情景を作り出す。子供も大人もその霧の中の不思議な空間にひたっている。日本では1970年の大阪万博ではじめて霧の表現を行い半世紀以上にわたり活動されている。驚いたのは、彼女が人工雪の研究で有名な中谷宇吉郎(なかやうきちろう)の娘だということである。私は中谷宇吉郎のエッセイ「雪」が大好きで、なんども読み返している。彼は物理学者の寺田寅彦の弟子で、世界ではじめて人工雪の結晶作りに成功した研究者である。それだけでなく、多くのエッセイや科学教育にも関わり、「科学は身近な生活のなかで味わうことが一番大切」をモットーにした。

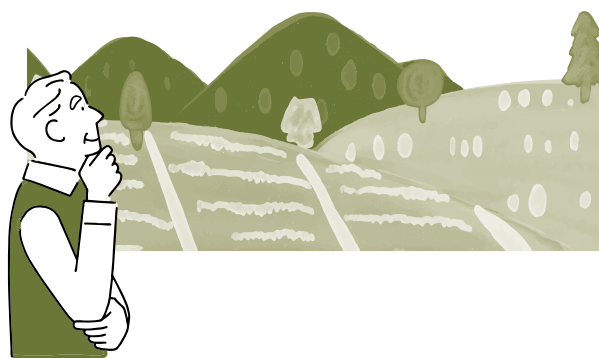
「自然に対して親密の情を失えば、自然は決してその秘密を明かしてはくれない」と語った。その娘である芙二子氏が「霧の彫刻家」として活躍しているのがとても印象的だった。彼女は、父の思い出とともに自分の仕事を「芸術家とは思わない、あくまでも自然と人間の交流する場を作りたい」と語り、芸術でなく彫刻という言葉につよい思いがあるようだった。

▼近代への問いかけ:中谷宇吉郎のメッセージ

番組の後半、新潟県の越後妻有里山現代美術館 MonETで、館内中央の回廊に囲まれた大きな池を舞台に、「霧神楽(きりかぐら)」を演出する。その舞台には舞踊家の田中泯も参加するという。田中泯といえばNHK朝ドラ「まれ」で塩作り職人を演じ、その凜とした立ち姿が記憶に残っている。彼は「場踊り」という即興の舞をおこなう舞踊家である。

「霧神楽」×「場踊り」、その舞台の一部を放映していたが、幻想的でありつつも、圧倒的な霧の存在感と人間の危うさのようなものを感じた。

芙二子は田中泯とのコラボを「ジャズ」のようだと語る。最初から細かな演出は決めず、即興で作出す「自然と人間の対話」だという。その舞台を見ながら私は、中谷宇吉郎が大切にしていた「自然の語る言葉に真摯に耳を傾ける、そうすれば自然はおのずと語り始める」という信念が、しっかりと娘の芙二子に引き継がれていると感じた。近代という世界に神はいない、人間だけが世界を操作し、人間に始まり人間に終わるという人間至上主義が常識となって久しい。だが、本当にそうだろうか。人間はすべてを操作し全知全能の神のような存在になれるのだろうか。そうではなからう。謙虚に自然の声を聞くべしという中谷宇吉郎のメッセージは、娘の芙二子を通じて現代へたしかに届いている。私たちは彼女の表現を味わうことで、人間は至上ではないことを思い出すのだ。そしてそれは、日本人がずっと昔から大切にしてきた季節の移ろいや里山の風景とどこか響き合うものがあるのである。



鳥取大学医学部
地域医療学講座
教授

谷口 晋一
(たにぐち しんいち)